おことの足趾〈あしあと〉（家島町）

むかし、むかし。この島に、どこからきたのか知る人のないおことと呼んだ大そう美しい娘が、人知れずバガ谷の洞穴〈どうけつ〉を住居にしておりました。島の人びとはそれを「バガ谷のばけもん」と呼んで、女、子どもの山入りをきびしくとめておりました。バガ谷の対岸〈たいがん〉の室津港〈むろつこう〉とは呼べば答える間〈あいだ〉がら、そこは播磨灘〈はりまなだ〉を同じ漁場〈りょうば〉とすることで仲よく、何をするにしても、手を取り合って、ほかの漁師たちからうらやまれておりました。そのことは今遺〈のこ〉っている“室〈むろ〉の浜〈はま〉”の地名のあることによっても知ることができます。

この室の浜に、室津〈むろつ〉の網元〈あみもと〉の一人息子松兵工が、仲よくしていた家島の人たちの好意〈こうい〉で、いわしの炒場〈いりば〉を作っていました。炒場にはたくさんの女手がいりました。
その中に、あの洞穴女のおことも いました。そのうちだれいうとなく、松兵工とおことの間に、変〈へん〉なうわさがたちはじめました。
うわさに、うわさが重さなると、二人の仲は、それに結びつけられたように、抜〈ぬ〉きさしならないまですすんで、かくれ家の洞穴は、ふたりの楽しい住家になりました。

そんな松兵工とおことの仲を、知ってか、知らずか、松兵工の親元では、室の浜の炒場〈いりば〉を引き揚〈あ〉げることになり、松兵工は家島から室津へ引きあげました。ことのなりゆきをおことに聞かせて、納得〈なっとく〉させばよかったのに、松兵工は何事も知らさず、ひそかに、そのまま室津港に引きあげようと船をこぎ出しました。
しかし、それを知って逆上〈ぎゃくじょう〉したおことは綱を持ち出し、全身に力をこめてかいくった綱を、松兵工の船をねらって投げ、力にまかせてたぐりよせようとしました。
ところが松兵工は、よせばよいのに鉈〈なた〉をとり出しふりあげて、綱をプッツリと切り落しました。女の腕とはいえ、死にものぐるいで張りたくっている綱が切りおとされたからたまりません。おことはその場にどんでん返えして死んでしまいました。

そのことがあってから不思議なことに、おことのふんまえた岩の上に、一念〈いちねん〉をこめたおことの足趾〈あしあと〉が深くきざまれて残りました。
島の人びとは今もそこを“おことの足跡〈あしあと〉”と呼んで敬遠〈けいえん〉し、まんまと家島をぬけ出した松兵工は、今も室津港内に＝生島＝となってこりかたまってしまったといっております。古いことわざに“人の一念〈いちねん〉岩をもとおす”という言葉がありますが、そのとおりです。